

愍愍に観音を帰信ひ福の分を願ひて現に大なる福德を得る縁 第三十一

御手代東人は、諸楽宮に宇御めたまひし勝宝心眞聖武太上天皇の代に、吉野山に入りて、法を修ひ福を求む。三年ばかりを遂て、観音の名号を称礼みて曰さく「南无銅銭万貫白米万石好女多徳施」とまうす。時に従三位粟田朝臣の女在り。いまだ通がず嫁はず。其の娘女、広瀬の家にして忽然に病を得、念々痛み苦しみて差止ゆるに由無し。粟田卿使を八方に遣りて禪師優婆塞を問求めしめ、東人に遇ひて拝み請へて呪護せしむ。卿の女、呪の力を被りて病愈え、すなはち東人に愛ふる心を発して終に交通く。親属東人を繋ぎ、閉め居ゑて擦櫛ふ。女愛ふる心に忍ぶること得ず、なほ哭き恋ひて其の辺を離れず。眷属量り定めて、東人を放し、更に夫妻にし、家合りて財物をみな既に施与へ、五位を白し賜はる。後に数年の年を遷、其の女死なむとす。時に其の妹に語りて曰はく「今吾れ死なむとす。一の冀意有り。もし聴許すやいなや」といふ。妹答へて曰はく「意樂に随はむ」といふ。妹語りて曰はく「妾れ東人の

恩を被り、なほ長に忘れじ。妹の女を以ちて東人の妻とし、家の裏を守らしめむと欲ふ」といふ。妹遺言を受けて、己が女を以ちて東人に敬与へ、家の財を主らしむ。東人現世に大なる福德を被る。是れすなはち修行の験力にして観音の威徳なり。更に応へざらむや。

第三十一縁 今昔物語集十六ノ十四に書承。一未詳。本説話以外に所伝をみない。二奈良県吉野郡。大峰山脈の北端あたり。東人は役優婆塞(上巻二十八縁)の徒の末流か。三何かの呪文の地口か。四「貫」は銭の単位。訓読は「はかり」。一貫は一十文。

五「石」は量の単位。一石は十斗、一斗は十升。六養老二年(七二)に制定された位階制(親王四階、諸王、諸臣三十階)の諸臣の第六位。七未詳。記録に残されている粟田朝臣姓の者には、本説話と年時、位の一致する者がいない。八大和国広瀬郡(奈良県北葛城郡河合町、広陵町あたり)か。九禪師が呪をもちいて治病する記述は、上巻二十六縁、下巻二縁、三十六縁にみえる。とくに下巻三十六縁は禪師と優婆塞とが登場。

一〇女が自らの病氣を治した行者と結ばれる説話に、今昔物語集二十ノ七、大和物語一〇五、がある。

二底本訓釈(撮櫛二合、加己不)。

三従五位下は諸臣の第十四位。

四兄、または弟。女の立場から男きようだいをいふ。男の立場から男きようだいをいふばあい、本書では「兄二弟」とされる。

五姉、または妹。男の立場から女きようだいをいふ。

六底本訓釈(主加止良之女)。

第三十二縁 善業についての現報説話。今昔物語集十一ノ十六に書承。

一七二七年。

七原文「九月中。この「中」の用法は、秦代の竹簡をはじめ中国資料にもみえるが、朝鮮の史記の文に多い(藤本幸夫)。

八奈良市山町あたり。

九未詳。穂積寺跡(奈良市東九条町)あたりか。底本訓釈(細か(保曾女))。